絵本と言語表現

～講義アンケート調査結果における考察～

廣　川　佳予子[1]
久保田　真規子[2]

本研究では保育者養成校における「絵本と言語表現」で絵本に特化した学びがどのような可能性を開くかについて明らかにすることを目的とした。具体的には、①絵本の学びと実践について、②絵本の学びと実習の心理的不安軽減について、③「絵本セラピー」体験とその手法を用いたグループ活動の成果、④絵本を用いたリアルコミュニケーションについて、⑤自由記述、以上５項目についてのアンケートを実施、その回答から分析を行った。さらに実習後、学生が読み聞かせ体験の場面を通し、アンケートの自由記載の子どもから学んだ結果から、保育を学ぶ学生にとって「絵本と言語表現」で絵本に特化した学びは実習および保育実践において有効活用できることが示唆された。

キーワード：絵本、読み聞かせ、「絵本セラピー®」、保育

１．研究の背景

戦後の日本に絵本の世界を広げた松井[3]は、「絵本は文・物語と絵とが一体となった本である。」「絵本は大人に読んでもらう本」と位置づけＮＨＫの番組で以下のように語っている。「絵本を読んでもらう嬉しさは、子どもが絵を読み、言葉を聞く、そして子どもの中で絵と言葉がひとつになり言葉がどんどん絵を動かすことにある。無意識に子どもの世界になり絵本体験となる。」これは、松井の幼児期の原体験に基づくものであった。

松井が出版した「こどものとも」は、絵と言葉が一体となった生き生きとした絵本を切り開くことを目指していた。「言葉で目に見えないものを目に見えるようにするのが絵本」という大切な体験がどのように園で実践されているのか。保育を学ぶ学生はどのように絵本と出会い、読み聞かせを学び、子どもと出会うのか。筆者らはコロナ禍の今、マスクで表情が見えない子どもや学生に危機感を抱き、絵本をツールとして保育現場の子どもや保育者から何を読み取ってくるか状況把握の必要性を感じていた。

先行研究における読み聞かせの意義について秋田・武藤（1996）[4]らは『幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動』の中で、「絵本の読み聞かせは、絵本のお話を単に子どもに伝達することによって、言葉や文字、物語の知識を与え育てると

いうことよりも、読み聞かせを行う主体である一般の母親の多くにとっては、子どもとの会話を楽しみ「空想・ふあい」という読み聞かせの過程自体が意味を持っていることを示している。

杉浦･清水（2014)[5]は、保育を学ぶ学生と人間生活科の学生にアンケート調査を実施し、①絵本は好きですか、には148名全員が好きと答え②読み聞かせをしてもらったことがありますか、には147名がしてもらったとあり、１名がいいえであった。このいいえと答えた人は､その横に｢覚えていません｣の書き込みがあったという。読み聞かせをしてもらった147名の結果では、２歳から４歳・５歳頃に読んでもらう経験をしている。読んでくれたのは、78％が母親、次に父親、幼・保の先生、先生、親という記述もあった。｢今好きな絵本は？｣には、半数が無回答、読んでもらった絵本が本を読むという興味、好奇心には結びつかなかったと記述されている。幼児期の読み聞かせの大切さはもとより､成育期、小中高、さらに大学生に対しても「絵本を読むこと」｢絵本を、声に出して読むこと」が重要な時代になってしまったのではと考察している。ICTが普及している現在、多様な家庭の価値観があり自宅に絵本がなかったとう学生もいる。保育を学ぶ学生が、授業で絵本と出会い、言葉と出会う、この出会いが読み聞かせの可能性を開くのではないかと大いに期待するところである。

２．問題と目的

2022年７月に実施された「コロナ禍が日本人のコミュニケーションに与える影響について」調査[6]によると、およそ人口の20％がコロナ禍でコミュニケーション力の衰えを感じているという。特に10代女性においては33％がコミュニケーション力の低下を感じており、その理由としておよそ78％が「人と話す機会が減ったため」と回答。低下したと感じる能力は「雑談・会話力」が多くを占め、さらに「大勢の人前で話をすること」に悩み「コロナ禍で孤独や不安を感じる機会が増えた」と感じる割合も高いという。コロナ期のソーシャルディスタンス(社会距離拡大戦略)は幼少青年期に育まれる基礎的なコミュニケーション力に対する自信を失わせてしまったといえよう。

コミュニケーション力の低下を自覚する日本人が増えたことが明らかになったものの、実際としてコミュニケーション力や会話力は他者との関係性のなかでしか育まれない能力であるから、なおのこと悩ましい。どのような環境、職種であれ私たちは何らかの形で他者と関わることは避けて通れない。コミュニケーションを交わし相互理解を深め多様性を知ることは保育現場のみならず私たちが社会で生きていくうえでとても重要なことである。保育者を志す学生にとってはなおのこと子どもとの積極的で親密なコミュニケーションは教育保育上、欠かすことができないものであろう。さらに入学後ほどなくして始まる実習では学生という立ち位置ながら社会生活を疑似体験することになる。そんな彼らが安

心して実習を迎えるために保育教材の一つである「絵本」を積極的に学ぶ可能性について明らかにしてみたいと思ったことが目的のひとつである。

また他者との関わりという観点から見たときに、多世代との関係性が希薄であり、特に子どもという存在を身近に感じないまま現在に至っている学生も増えているなか、彼らが子どもへの理解を深め把握するためにも「絵本」をツールとして活用できないかと思案した結果、「相互理解を深める」「コミュニケーションを円滑にする」「多様性を認め合う」体験ができる「絵本セラピー」を導入、その手法を用いたグループ活動を試みた。

また保育の一環で行われる絵本の読み聞かせは、コミュニケーション力の低下を自覚する日本人が苦手とする「大勢の人前で話をすること」にほかならない。誰でも最初は大勢の前で話をすることには不慣れであるが、絵本の読み聞かせを通して子どもと絵本世界を共有する体験は互いの心と心が通い合うコミュニケーションの基盤を育むことができ、子どもという他者を理解するきっかけとなる。このことから本研究では実習における読み聞かせ体験で学生はどのように子どもへの理解を深めることができるのか、実習場面で学生たちは絵本が育むものについて具体的に何を学ぶのか、絵本の内容をより効果的に伝える方法について何を感じ持ち帰るのかを明らかにしてみたい。

さらに保育を志す学生の幼少期における絵本体験の乏しさについて危惧されることが多い昨今だが「保育者志望学生の絵本体験に関する研究」(2013)[7] を著した佐野は、保育者を志望する学生にとって絵本は肯定的存在であり積極的に学びたい対象となっているものの、幼少期の絵本体験の有無が読み聞かせ技術や知識に関する自信の有無に影響していることを明らかにした。そこで本研究では本学にも幼少期の絵本体験が乏しい学生がいると仮定し、絵本を読む技能、絵本に関する基本的知識や絵本が育むさまざまなものを学ぶことで学生に心理的不安の軽減をもたらすかどうか、自信の獲得にどのような影響を与えるのかを明らかにしてみたいと考えた。

以上これらの点を明らかにすることにより保育者養成校における「絵本と言語表現」において絵本に特化した学び、および、絵本コミュニケーションがどのような可能性を含んでいるかが判明し、今後の保育者養成におけるコミュニケーション力の向上と絵本の方向性に何らかの示唆を与えることができると考える。

３－１　研究対象と研修内容

本校で保育を学ぶ１年生を対象に、Ｘ年度の実習に出る前に３回の絵本セラピーの講義を実施した。筆者ら２名が講義を担当しその後、①絵本の学びと実践について、②絵本の学びと保育実習の心理的不安軽減について、③「絵本セラピー」体験とその手法を用いたグループ活動の成果、④絵本を用いたリアルコミュニケーションについて、⑤自由記述、以上５項目についてのアンケートを実施、その回答から分析を行った。

３－２　倫理的配慮

研究代表者及び共同研究者は、言語表現の授業を受講した学生に対しアンケート協力の説明と依頼を口頭で行った。質問紙は、記名式であるが、データ化の際には記号化し、個人が特定されないように十分に注意して取り扱うことを説明した。

３－３　方法

保育を学ぶＡ校１年生78名に対し、Ｘ年６月の期間に３回の絵本セラピストの授業を実施し、授業と実習終了後に質問紙に回答を求めた。質問紙への回答は、前後とも留め置き法であった。調査概要は以下の通りである。

調査概要

⑴　調 査 日　令和Ｘ年６月・７月

⑵　調査方法　設問と自由記述によるアンケート

⑶　回答者数　74名

⑷　調査項目

①絵本の学びと実践について８項目

②絵本の学びと保育実習の心理的不安軽減について３項目

③「絵本セラピー」体験とその手法を用いたグループ活動の成果５項目

④絵本を用いたリアルコミュニケーションについて４項目

⑤自由記述

⑥実習終了後、読み聞かせを園で実践した学生に子どもの姿から学んだことに関する自由記載

質問紙の最後には、感想等の自由記述による回答を求めた。授業参加者の負担を考慮し、任意回答を原則としたが、終了後の質問紙を配布する際には、今後の参考にするために回答頂きたい旨を伝えた。さらに実習終了後、読み聞かせを園で実践した学生に子どもの姿から学んだことに関する自由記載をお願いした。

４．授業後調査結果

初めて絵本セラピストからの授業後、グループＡ、グループＢからアンケートをとり、集計後以下に基礎情報を図に整理した。

４－１　絵本の学びと実践について

Ａ　絵本について

Ａ-1　さまざまな絵本に出会えたか

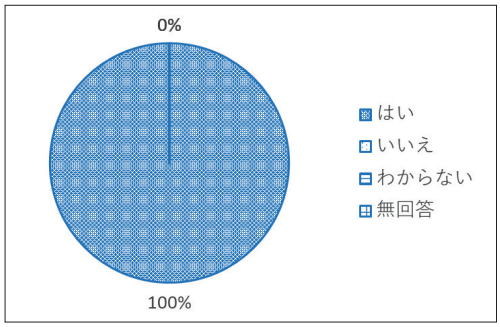

図 4-1-A-1-1　さまざまな絵本に出会えたか

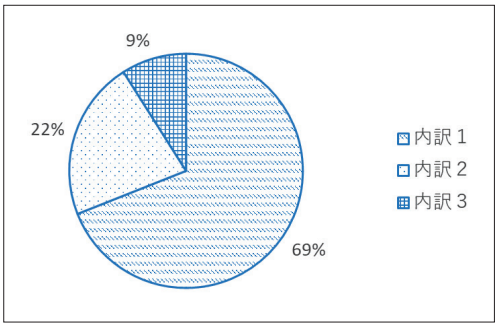

図 4-1-A-1-2　理由

講義を通して「さまざまな絵本に出会えた」100％の回答を得た（図4-1-A-1-1）。100％の内訳は「未知の絵本に出会えた」69％、「絵本の種類を知ることができた」22％「年齢別の絵本を知った」9％であった（図4-1-A-1-2）。さまざまなジャンルの幅広い絵本に触れておくことで実践に活用できるだけでなく、学生自身が絵本に関心を持つきっかけにもなると思われた。

Ａ-2　脳の育ちと絵本について理解できたか

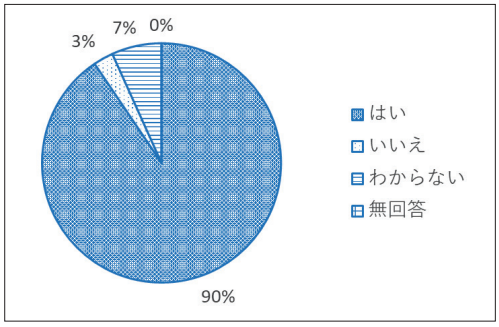

図 4-1-A-2-1　脳の育ちと絵本について理解できたか

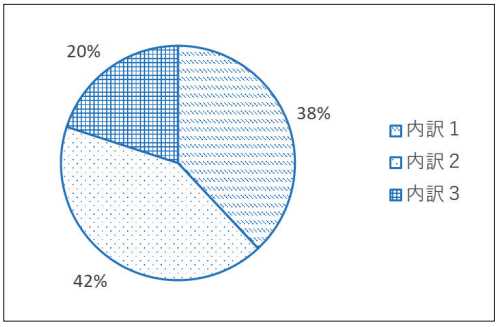

図 4-1-A-2-2　理由

脳の育ちと絵本について「理解」90%の回答を得た（図 4-1-A-2-1)。理解が高かった内容として「社会性や共感性などの発達」38%、「右脳と左脳の働きの違い」42%、「年齢に応じること等」20%となった（図 4-1-A-2-2)。幼児期に触れる絵本が育むものを具体的に知ることで絵本の重要性が伝わったと思われる。

A-3　絵本による言語情報について学べたか

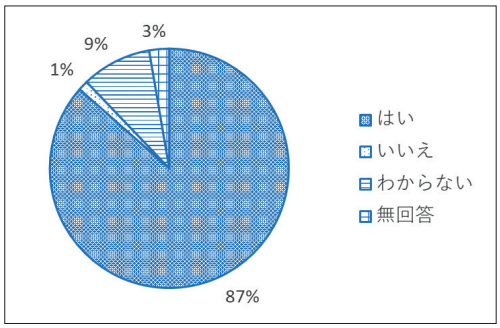

図 4-1-A-3-1　絵本による言語情報について学べたか

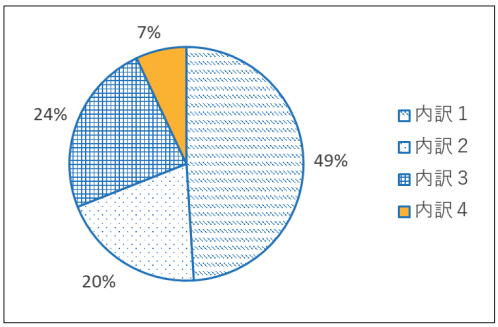

図 4-1-A-3-2　理由

絵本による言語情報について「学べた」と87%の回答を得た（図4-1-A-3-1)。学びの内訳は「語彙力の増加」49%、「読解力」20%、「読み方など」24%、「よくわからない」7%（図4-1-A-3-2)。絵本を読むことで言葉の数が増えるだけでなく言語は思考を整理し情緒を育むものであることを学べた、文字を読むだけでなく反応してきた子どもに返すことが大切である、絵本から様々な言葉の表現について学べたが言語情報となる不明などの声もあった。

A-4　読み聞かせについて大切なことが理解できたか

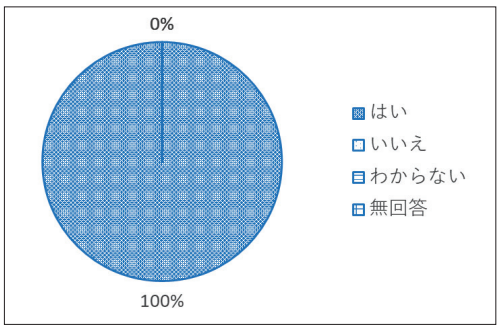

図 4-1-A-4-1　読み聞かせについて大切なことが理解できたか

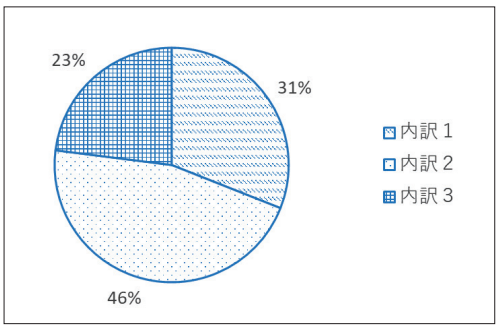

図 4-1-A-4-2　理由

読み聞かせについて大切なことを「理解」できた100％の回答を得た（図4-1-A-4-1）。理解が高かった内容として「聞き手と読み手のコミュニケーション、一体感、没入感」31％、「声のトーンや表現力」46％、「絵本は子どもの心を育む等」23％であった（図4-1-A-4-2）。絵本の内容に合う読み方を心掛けたい、声色、速度、大きさ、表情で表現することで子どもは絵本の世界により入れる、「ゆっくり」「ていねい」「心を込めて」読むことが大切、などの感想のほか、子どもは絵本を通じて感情が豊かになる、読み聞かせは子どもの心や考える力を育むなどの声があった。

B　実践のポイントについて

B-1　絵本の選び方

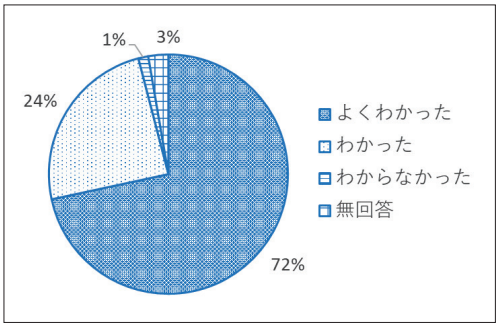

図 4-1-B-1-1　絵本の選び方がわかりましたか

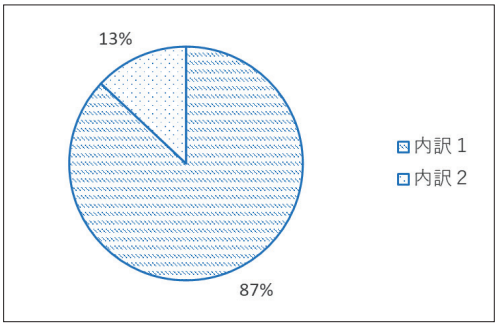

図 4-1-B-1-2　理由

絵本の選び方が「よくわかった、わかった」を合わせ96％となった（図4-1-B-1-1）。内訳として「年齢にあった絵本選び」87％、「参加型絵本の重要性など」13％であった（図4-1-B-1-2）。話の長さ、ストーリー性、絵の大きさ、繰り返しの有無、情報量など子どもの生育段階に応じた選び方に理解が深まったと思われる。

B-2　絵本の持ち方

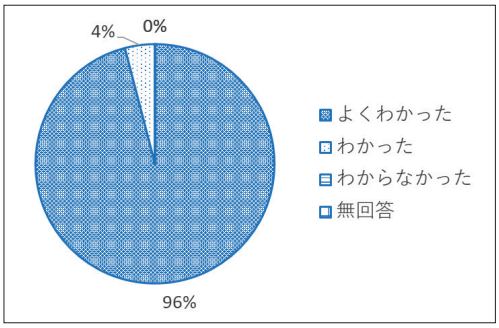

図 4-1-B-2-1　絵本の持ち方は理解できたか

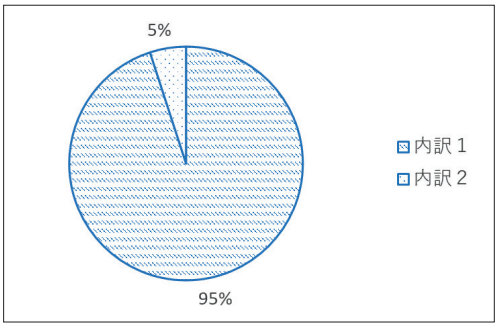

図 4-1-B-2-2　理由

絵本の持ち方が「よくわかった、わかった」を合わせ100%となった（図4-1-B-2-1)。内訳として「基本的な持ち方」95%、「高さや目線」5%（図4-1-B-2-2)。グラグラせず傾かない安定する絵本の持ち方、ページのめくり方を実践通して学んでいた。

B-3　絵本を読むときの声の出し方

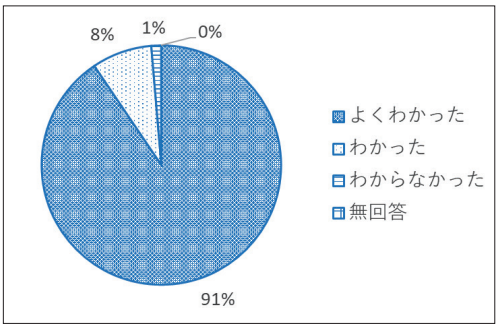

図 4-1-B-3-1　絵本を読むときの声の出し方は理解できたか

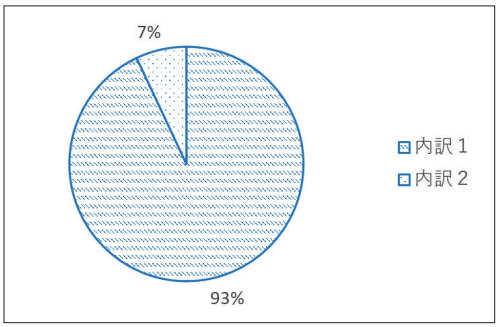

図 4-1-B-3-1　理由

絵本を読むときの声の出し方が「よくわかった、わかった」を合わせ99%となった（図4-1-B-3-1)。内訳として「発声、技術面」93%、「セリフとナレーションの区別など」7%（図4-1-B-3-2)。乳幼児に有効な読み方としてマザリーズ（母親語）があること、声の強弱やトーン、速さ、間の取り方などに関心をもって学んでいる様子がうかがえた。

B-4　絵本を読むときの表現について

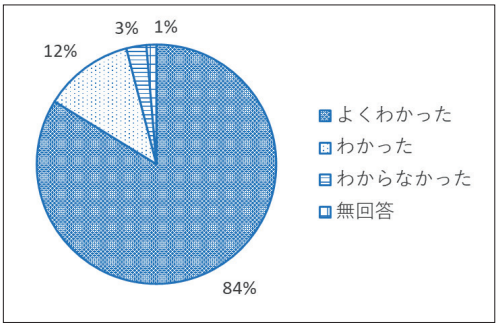

図 4-1-B-4-1　絵本を読むときの表現について理解できたか

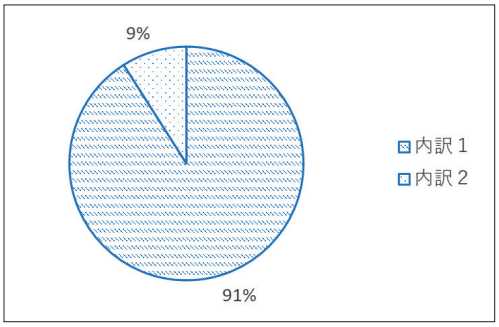

図 4-1-B-4-2　理由

絵本を読むときの表現について「よくわかった、わかった」を合わせ96%となった（図4-1-B-4-1)。内訳として「表現法」91%、「留意点」9%となった（図4-1-B-4-

2)。マスクで読み手の顔がよく見えず目だけで表情を伝えるのは難しいと感じたが声で伝えられると知って実践しようと思った、声色や速度だけでなく視線や表情を応用することが大事だと感じた、絵本の中の会話文を意識することで立体感が生まれより集中して聞いてくれると感じた、「！」や「？」や「…」で多くのことを表現できると学んだ等の感想があった。留意点としては過剰な表現がよいと思っていたが過剰な演出はよくないと学んだという声があった。

４－１　絵本の学びと実践について（A 絵本 B 実践ポイント）の考察

幼児期に絵本体験が乏しい学生もいると思われるなか、さまざまな絵本を知ることは絵本に関心を持つきっかけになる。また絵本が育むものについて具体的に学ぶことは保育者を志す学生たちにとってさまざまな可能性を示唆してくれることが分かった。絵本の内容をより効果的に伝える方法について非常に関心が高く、保育現場で絵本読み実践者となることを深く意識している様子がうかがえた。

４－２　絵本の学びと保育実習の心理的不安軽減について

1、絵本に特化した講義は保育実習に対する不安を軽減したか

絵本に特化した講義は保育実習に対する不安を「軽減した」65%、「わからない」23%、「軽減しない」12%となった（図4-2-1)。実習先で絵本を読むことになったので上手に読めるか心配だったが読むポイントを理解できたので少し不安が軽減した、自信がついたので焦らず読めそう、不安が軽減したわけではないが役立つことはたくさん学べた、絵本以外の不安要素が多すぎる、などの声があった。

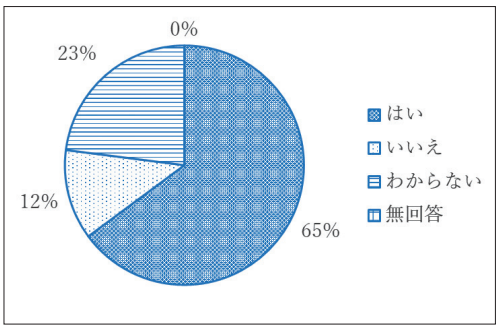

図 4-2-1　絵本に特化した講義は保育実習に対する不安を軽減したか

2、今回学んだことは実習で応用できるか

今回学んだことは実習での応用が「とてもできる、できる」を合わせ93%となった（図 4-2-2)。聞いている子どもたちが集中できるよう参加型

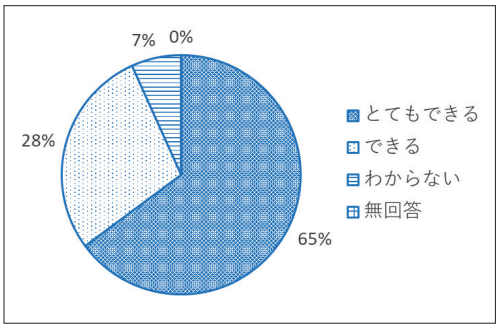

図 4-2-2
今回学んだことは実習で応用できるか

絵本を取り入れたい、絵本以外の場面でもアイコンタクトを用いて積極的なコミュニケーションを心がけたい、自分と子どもたちの世界を作ることで子どもとの信頼性を少しずつ築けると感じた、などの感想があった。

3、絵本に特化した講義は保育を学ぶ学生にとって役立つか

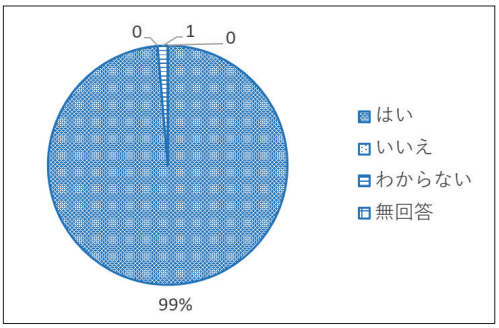

図 4-2-3-1　絵本に特化した講義は保育を学ぶ学生にとって役立つか

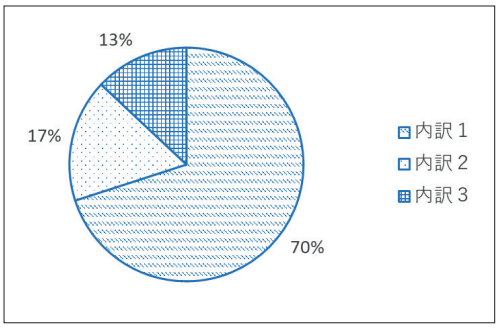

図 4-2-3-2　理由

絵本に特化した講義は保育を学ぶ学生にとって 99%が「役立つ」と回答（図 4-2-3-1）。その内訳としては「実習に役立つ」70%、「子どものために知っておくべき」17%、「その他」13%であった（図 4-2-3-2）。絵本の読み方を詳しく教えてもらえる機会はあまりないのでとても貴重な経験だと思う、発達段階に応じて絵本を選べるかは保育者にとってとても必要なことだと感じた、幼児と切り離せない絵本がどんな役割を持っているのか学べた、などの声もあった。

４－２　保育実習の心理的不安軽減についての考察

保育実習前の学生たちは学ぶことややるべきことが重なり精神的に不安定であることも多いと思われるが、ある特定の分野での学びを深めること、模擬的な予行を重ねることで不安軽減のきっかけになることが分かった。絵本を読む技能、絵本に関する基本的知識や絵本が育むさまざまなものを学ぶことは自信の獲得につながることが示唆された。

４－３.「絵本セラピー」体験とその手法を用いたグループ活動の成果

1、「絵本セラピー」を知っていたか

「絵本セラピー」は 95％が非認知でありほとんどの学生が「絵本セラピー」初体験であった（図 4-3-1）。

2、「絵本セラピー」を体験してよかったか

「絵本セラピー」を体験してよかったと 97％が「はい」と回答（図 4-3-2）。

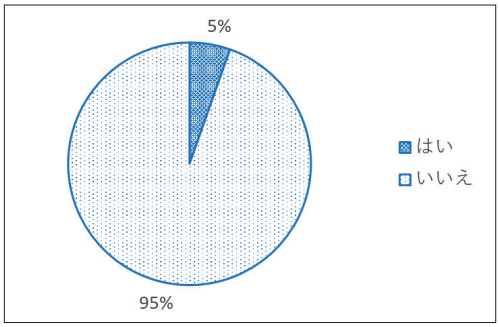

図 4-3-1　「絵本セラピー」を知っていたか

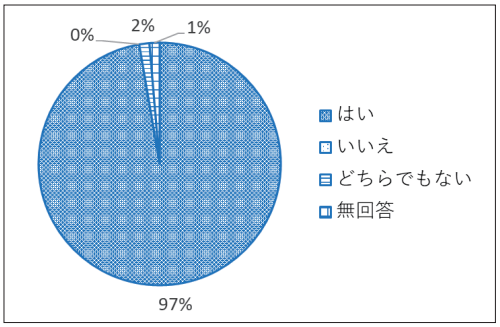

図 4-3-2　「絵本セラピー」を体験してよかったか

3、短大に慣れてきた 6 月に「絵本セラピー」を体験してよかったか

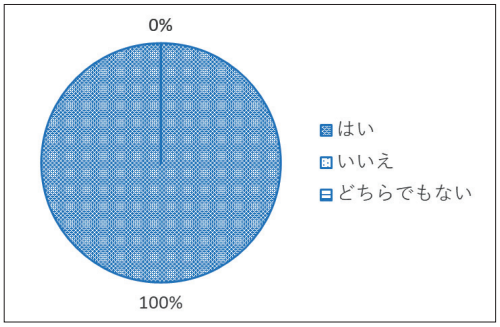

図 4-3-3-1　6 月に「絵本セラピー」を体験しよかったか

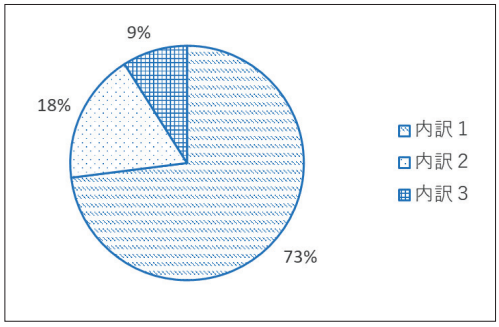

図 4-3-3-2　理由

環境に慣れてきたころの「絵本セラピー」体験が「よかった」100％の回答を得た（図 4-3-3-1）。その理由として「実習前のため」73％、「絵本の理解が深まったため」18％、「その他」9％（図 4-3-3-2）。自分が今まで気づかなかった新しい発見をすることで思考整理や自分を客観的に把握するきっかけとなった、絵本セラピーでのグループシェアでは自分の意見を言いやすかった、いろいろな絵本に出会えて自分を見つめなおす参加型の絵本の面白さを知れた、などの声もあった。

4、「絵本セラピー」におけるグループワーク（シェアリング）は効果的だったか

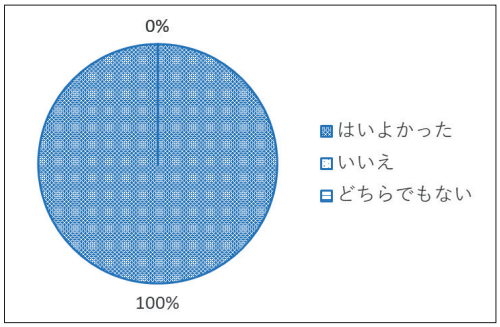

図 4-3-4-1　グループワークは
効果的だったか

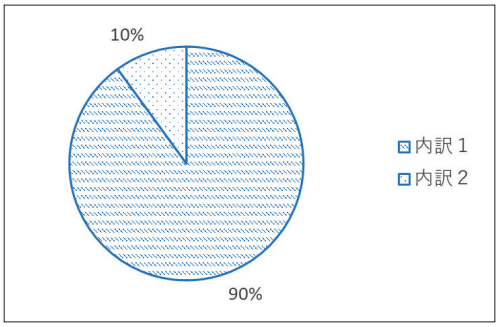

図 4-3-4-2　理由

「絵本セラピー」におけるグループワーク（シェアリング）に 100％が「効果的」と回答（図 4-3-4-1)。理由として「他人の意見が聞けてよかった、視野が広がったなど」90％、「その他」10％（図 4-3-4-2)。他者の意見、他者が選んだ絵本で新しく学ぶことが多かった、相手のいいところに気づくことができた、他者と意見を共有し自分とは違う視点や考え方を知るきっかけになった、新しい発見や視野の広がりや気づきを得た、互いに持ち方などを指摘しあい多くの刺激を得た、読みあいをすることで子どもの気持ちが理解できた、入学してから 2 か月で話したことのない人もたくさんおり、グループワークで少しでも仲良くなれたから、などの声が聞けた。

5、「絵本セラピー」体験と絵本セラピストによる講義により自身が変化したことがあるか

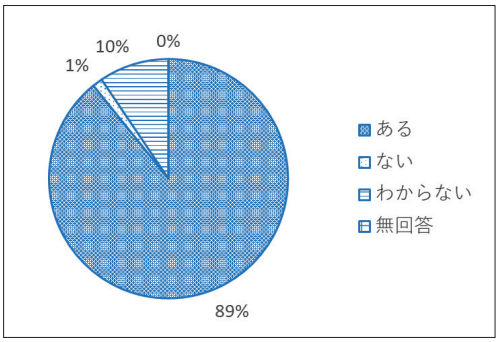

図 4-3-5-1　「絵本セラピー」体験と
絵本セラピストによる講義により
自身が変化したことがあるか

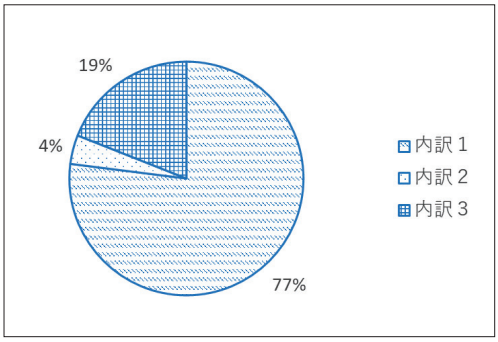

図 4-3-4-2　理由

「絵本セラピー」体験と絵本セラピストによる講義による自身の「変化あり」89％、「わからない」10％の回答となった（図4-3-5-1)。変化の内訳として「読み方や持ち

方など技術面での変化」77%、「絵本の選び方」4%、「絵本への関心」19%（図4-3-5-2）。絵本読みは得意ではなかったが細かい指導や友達と読みあいで以前より自信がついて堂々と読めるようになった、読むことで手いっぱいになり子どもたちまで意識が行かなかったが少しずつ意識を向けられるようになった、絵本は子どもたちと保育者のコミュニケーションに使われる以外にも子どもの心に温かい言葉をたくさん入れることができ、たくさんの言葉と出会うきっかけを作ってくれることを学べた、子どもの成長過程に大切なものをたくさん教えてくれると感じた、などがあった。

４－３「絵本セラピー」体験とその手法を用いたグループ活動の考察

入学からおよそ２か月後というタイミングでの「絵本セラピー」体験は100%が肯定的な感想と非常に手ごたえのある結果となった。さまざまな可能性が開かれること、多様性を知り相互理解を深め、人間的成長につながる可能性を示唆することが分かった。「絵本セラピー」グループワークでは会話テーマやトピックが限定的ではあるものの、コミュニケーションのきっかけになること、他者を通して新しい発見や視野の広がり、気づきや刺激などを得た学生も多く、他者理解、自己認識へ成長を促す効果も見られた。昨今のSNSコミュニケーションやオンラインでのつながりとは異なる、目の前の人間とのやり取りでのみ受け取れるものを感じていたようにも思われた。

４－４　絵本を用いたリアルコミュニケーションについて

１、絵本を用いたコミュニケーションの有効性について理解できた

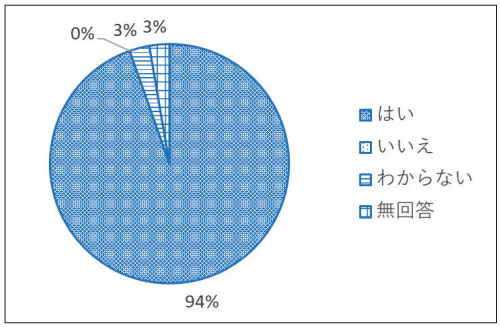

図 4-4-1-1　絵本を用いたコミュニケーションの有効性について理解できたか

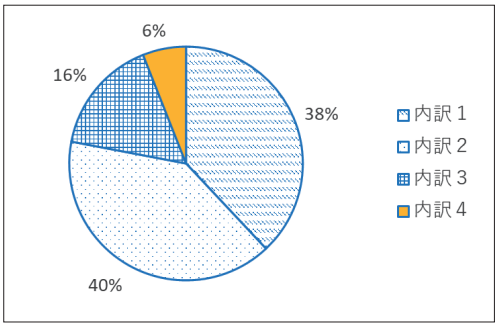

図 4-4-1-2　理由

絵本を用いたコミュニケーションの有効性について「理解」できたと94%と回答（図4-4-1-1）。内訳は「愛着の絆、信頼関係」38%、「コミュニケーションの重要性」40%、「語彙力の発達」16%、「その他」6%（図4-4-1-2）。保育者と子どもが絵本を通じてコ

ミュニケーションをとることでその場が安心安全なものになり信頼につながることが分かった、絵本の共感から信頼関係を築くことができると学んだ、などの声があった。

2、教育のＩＴ化に伴うリアルなコミュニケーションの必要性について学べた

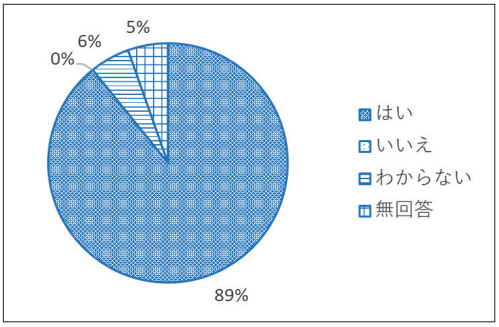

図 4-4-2-1　教育のＩＴ化に伴うリアルなコミュニケーションの必要性について学べたか

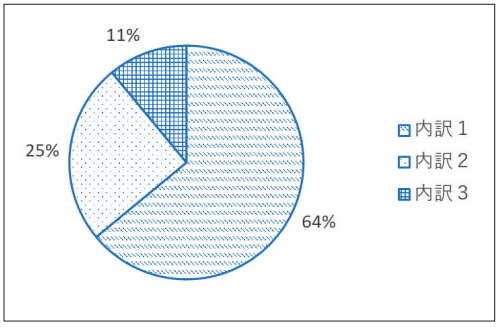

図 4-4-2-2　理由

教育のＩＴ化に伴うリアルなコミュニケーションの必要性について「学べた」89%となった（図4-4-2-1)。内訳として「リアルコミュニケーションの重要性」64%、「感情の発達」25%、「その他」11%（図4-4-2-2)。対面でのやりとりは一方通行ではなく互いの反応があることで人間同士のやり取りが育まれていくことを学べた、絵本は「心と心の通いあい」でコミュニケーションの基本となること、リアルに存在する目の前の人間との言葉のやり取りは今後教育に必要になってくると感じた、ゲームやネットばかりしていると他者と話す時間が少なくなってしまう。人と関わる機会があればいろんな感情が湧き自分の気持ちを言葉にすることで言語力が上がるなどプラスになることが多いと感じた、人の気持ちに気づくことができる力、考える力はどの時代でも大切だと分かった等の記述があった。

3、教育のＩＴ化に伴い乳幼児期に絵本に触れておくことの大切さについて学べた

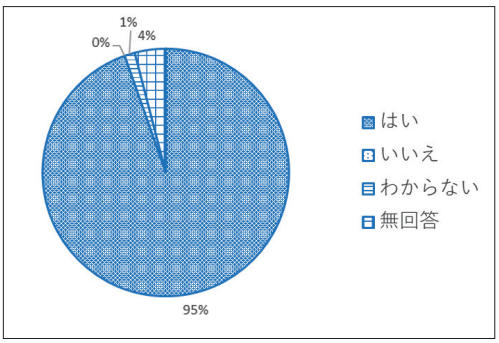

図 4-4-3-1　教育のＩＴ化に伴い乳幼児期に絵本に触れておくことの大切さについて学べたか

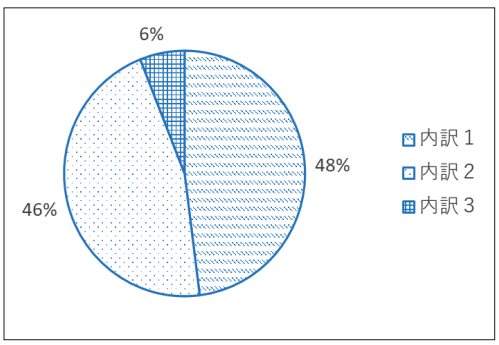

図 4-4-3-2　理由

教育のＩＴ化に伴い乳幼児期に絵本に触れておくことの大切さについて「学べた」95％となった（図4-4-3-1）。内訳として「絵本に触れることの大切さ」48％、「発達、愛着形成、成長」46％、「その他」6％（図4-4-3-2）。ＩＴ化はいいことだが一方通行のメディアでは共感性、社会性、想像力、思いやりなどの心が育まれないと知った、先生・子ども・本という関係性がコミュニケーションのはじまりとしてちょうどよい、読む力をつけることで今後の学習も有利になると感じた、などの記述があった。

4、非言語コミュニケーションについて理解を深めることができた

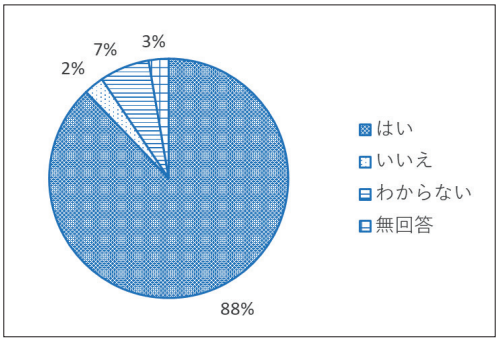

図 4-4-4-1　非言語コミュニケーションについて理解を深めるこがきたか

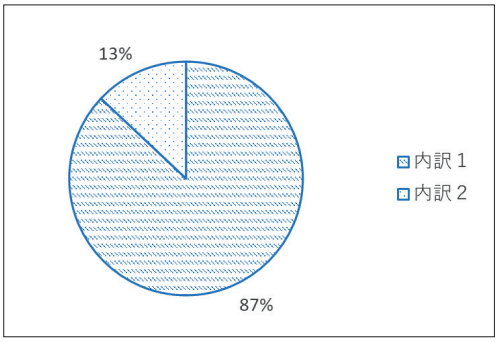

図 4-4-4-2　理由

非言語コミュニケーションについて「理解を深めることができた」と 88％が回答（図4-4-4-1）。内訳として「声や表情、表現技法」87％、「その他」20％（図 4-4-4-2）。コミュニケーションにおいて「視覚情報」や「聴覚情報」が 90％を占めることが分かって驚いた、表情でセリフの感情を伝えると読んでいる方も楽しくなると思った、読解力は読み方のみでなく表現の仕方にも関わるため視線や表情にも気を付けて読みたいと思った、声の明るさや表情によって絵本の内容の受け取り方も変わってくると感じた、ただ絵本を読み聞かせするのではなく、登場人物の気持ちや表情が伝わるように表現する必要がある、などの声があった。

４－４　絵本を用いたリアルコミュニケーションについての考察

マスク環境で育つ子どもたちは大人たちのリアルな表情に触れる機会も多くなく、このため積極的にコミュニケーションをとることの重要性について気づきを深めた学生が多いことが分かった。安心安全な環境で読まれる絵本は共感をより深め子どもたちとの信頼関係を築く。また幼児期における他者とのコミュニケーションは子どもたちの社会生活の基盤となっていく。ぜひ実践に生かしてほしいと思う。

４－５．自由記述（全３回の講義を通して一番印象に残っている話）

学生調査の自由記載の中から主な記述を以下に示す。

・マザリーズで絵本を読むことが大事
・大人と子どもで読み聞かせ型を変えること
・絵本の読み聞かせ方、持ち方
・本で人の心は救われる
・絵本は「心と心の通い合い」であり、コミュニケーションの基盤であるということ
・絵本でコミュニケーションをとることで絆が深まっていくこと
・優しい言葉を使っている絵本をたくさん読み聞かせるとその子も優しい言葉があふれるということ
・学級崩壊してしまったクラスに読み聞かせをしに行った時の話を聞いて「絵本の力」に驚かされた
・講師の読み聞かせをしている姿が一番印象に残っている。声のトーン、スピード、持ち方などすべて違って、それを意識しながら自分もやってみたら楽しく絵本が読めて聞き手とコミュニケーションができた気がして何かつかめた感じがした

５．実習後読み聞かせに関する調査結果

実習前調査結果から幼児期に絵本体験の乏しい学生もいること、本講義でさまざまな絵本を知り、絵本に関心を持つきっかけになった学生がいることが分かった。では、実習場面で学生たちは絵本が育むものについて具体的に何を学んできたのか、絵本の内容をより効果的に伝える方法について何を感じてきたのか、絵本の読み聞かせを体験している子どもの姿から学んだことを実習後の自由記載から考えたい。

本調査は、学生の初めての教育実習後に学生が自由記載したものをKJ法で抽出し層別したものである。さらに①から⑪のワードがどのようにかかわっているかまとめ、表５－１に示した。

ここから絵本の選び方＝子どもが十分に没入できる世界かどうか。訪れる余地のある世界か、十分に体験できる世界かどうか、絵本の絵の読み方（表現法）＝子どもをしっかりと絵本世界に連れていくための方法､絵本世界へいざなうための読み方ができているのか。子どもを現実世界に置いていかない配慮が必要という気付きの記載が多かった。

ページのめくり方＝子どもが効果的に絵本に没入するための速度も重要であることや、特に着目すべき点は、「絵本の絵を読む子どもの姿＝絵本世界の観察を読み手である学生がくみ取っていること」である。さらに「絵本に入り込む子どもの姿＝没入感、絵本への反応＝絵本世界での多様な楽しみ方､一人ひとり異なること」も感じている｡「コミュニケーション＝絵本世界を読み手と共に、周囲の友人と共に旅している証や確認＝一体感、共有

体験」は、子どもの姿を見つめ声を聞くことで理解していた。

子どもが絵本の世界に入り込むためにも「環境、導入＝絵本世界にしっかりと没入させるための点検準備」が必要ということも学んでいる。

学生の気付きは、先行研究で松井（2001）が述べる「絵本を読んでもらう嬉しさは、子どもが絵を読み、言葉を聞く、そして子どもの中で絵と言葉がひとつになり言葉がどんどん絵を動かすことにある。無意識に子どもの世界になり絵本体験となる。」という体験に、学生自身がより近づく体験といえるだろう。

表５－１　自由記載内容の層別

層別	NO	自由記載内容
①絵本への反応	C-3	園の先生と自分と全然ちがった
	C-4	１人１人聴き方が違う
	C-16	３歳児は読み聞かせに反応する
	C-23	じっくり聞く子、リラックスして聞く子様々であった
	C-26	想像していた姿より多くの反応をもらった
	C-30	子どもの反応をみながら読むことやクラス、年齢に合わせた読み方をする
	C-37	読み手により聴き方や反応が違う
	D-4	興味が大きいほど反応が大きく集中も続く
	D-5	先生にその反応を受け入れてもらうと嬉しそうにする
	D-10	静かに観ている子もいれば、反応しながら見ている子もいる
	D-53	絵本の内容に沢山反応していた
②絵本に入り込む	C-5	絵本に夢中になっている子もいる
	C-6	絵本をじっくり見ている子どもは楽しい場面になると笑った
	C-7	不思議に思う場面になると「なんで」と声に出し物語の世界に入り込んでいる
	C-12	内容がわかる子は次の場面を想像できる
	C-17	４歳から５歳になると静かに目をキラキラし集中していた
	C-19	絵本の世界にのめりこむような読み方が大切である
	C-21	絵本の読み聞かせを聞きながら子どもなりの解釈や発想を楽しんでいる
	C-29	年少さんでも年中・年長さんと一緒だと集中して聞いていた
	C-45	「この絵本の○○が可愛かったね。」と絵を集中して見ている
	C-47	想像をふくらませていた
	C-55	集中して「これ何」と問いかけながら聞いていた
	C-48	絵本の世界に入っていく子がいる
	D-17	保育者が読み聞かせをしていると物語の世界に入っている子が多い

層別	NO	自由記載内容
②絵本に入り込む	D-24	絵本の世界に入り込むようによむことが読み聞かせの仕方だと思う
	D-34	場面から様々なことをイメージしていた
	D-38	絵本の世界に入っているのを直接見ることができた
	D-44	5歳児は集中していた
	D-48	いつも元気な子どもが絵本の読み聞かせになると集中していた
	D-55	3歳児も夢中で聞いていた
	D-57	絵本が始まると楽しんでいた
	D-58	どんどん集中して聞いていた
	D-59	子どもは集中して聞いていた
③捲り方	C-1	子どもの声をききながらページをめくる速度が大事だと学べた
	C-15	ゆっくりめくると「次何！」とわくわくしている様子が感じられた
④絵本の「絵」の読み方	C-2	先生がよむのが上手だと絵本に入り込みやすい。園の先生と自分と全然違った
	C-8	絵本の読み方を考える
	C-14	また先生の間の取り方が上手い
	C-28	読むのが下手でもゆっくり聞き取りやすいように読むと静かに聞いてくれた
	C-31	クラス、年齢に合わせた読み方をする
	C-38	子どもを惹きつける読み方は大切である
	C-42	年齢により読み方を変える
	C-50	子どもが聞き取りやすいようゆっくりと読み間をとる
	D-12	もっとゆっくり読むとよかった
	C-50	子どもが聞き取りやすいようゆっくりと読み間をとる
	D-12	もっとゆっくり読むとよかった
	D-14	声に変化を付けて話さないと飽きてしまいそうなので、次にどうなるかわくわくする読み方をする
	D-16	年齢により読む速さも大切だ
	D-19	子どもが飽きない工夫・援助が必要であった
	D-41	持ち方を変えたり工夫が大切であった
	D-42	こどもが絵本に興味を持つよう声の調子を変える
	D-43	話すスピートを変えるなど変化を付けて読む
	D-50	短い絵本を丁寧に読みたい
	D-60	一方的な読み聞かせになった
	D-61	子どもと一緒に楽しめるように読めたらよかった

層別	NO	自由記載内容
⑤絵本の選び方	C-9	絵本の選び方を考える
	D-2	その日の子どもに合わせた絵本選びが大切であった
⑥絵本の「絵」を読む子どもの姿	C-18	本を見ているだけではない
	C-22	「○○がいる」など細かいところまで絵をじっくり見ている
	C-24	絵の細かいところまでよくみている
	C-25	絵を見る時間をとることが大切
	C-32	私たちの着眼点と子どもの着眼点が大幅に違うこともある
	C-40	1歳から3歳は絵を見ていた
	C-44	子どもは学生が気付かないところまで気付いていた
	D-3	絵本の絵の中で自分が気付かないところに気付く子どもがいた
	D-11	絵を見る姿が多い
	D-22	絵を見てその場面の感情状況を読み取っている
	D-25	子どもたちは見ている絵を見ていた
	D-28	絵本の絵をよく見ている
	D-32	自分が思っていた以上に絵本に夢中である
	D-33	私たちが気付かない小さな変化に気付いた
	D-47	3歳児は絵を楽しんでいた
⑦その他	D-29	先生の表情をよく見ている
	C-51	絵本が終わると先生が読んだ絵本を自由遊びの時に開いて見ていた
	D-9	子どもの感受性や意欲を伸ばしたいと思った
	D-15	事前に絵本を読みこどもがわかる語彙か調べることが大切だとおもった
	C-33	細かいところまで絵本に目を通すことが大切だ
	D-36	思いやりの心は大切だと感じた
	D-54	全ての子どもの声を拾うと絵本が進まない
⑧導入	C-13	絵本の前に手遊びを入れることで先生のほうに自然に目を向けていた
	C-43	読む前に手遊びを入れ先生に目を向けていた
	D-8	導入を大切にしていた
⑨環境・前に	C-35	前に出で来る子がいる
	C-36	「見えない」と言われ、見えない子どもに移動することを伝える言葉がけが必要である
	C-49	皆が楽しめる環境づくりも大切だと感じた
	C-59	どんどん前に出てくることもわかった
	D-20	「見えない」と不満がある子がいた

層別	NO	自由記載内容
⑨環境・前に	D-39	こどもが大勢いる場合は子どもが前に行って聞きたいと思う姿がある
	D-40	保育者が見えやすい位置を考える
	D-51	こども自ら見えやすい場所に移動する
	D-56	見えない、狭いという子が多かった
	D-62	最前列の子は見えにくいので少し角度を変える
⑩言葉・文字	C-10	文字が少ない絵本でも言葉を大切に読む子とが大切だと学んだ
	C-41	4.5歳児は自分で文字を読み楽しんでいる
⑪コミュニケーション	C-20	読んでいるときに子どもに子どもに語り掛けることも大切だと思った
	C-27	子どもは素直に自分を表現し思いを伝えていた
	C-34	ページで質問や受け応えができ読みやすくなる
	C-39	絵本の文から次の展開を予想し反応を返してくれるのでそこに答えていくことが大切である
	C-46	絵本の中の文章の問かけにもこたえていた
	C-52	子ども同士でページを捲っている姿がみられた
	C-53	授業では子ども役になってみたが実際の子どもはもっと絵本に興味を持っていた
	C-54	虫が戦う場面で「がんばれ」と声をあげながら聞いていた
	C-57	友達と楽しんでいる子もいる
	C-58	読み手がチラチラ子どもたちを見ると笑っているのがわかるので子どもを観ることが大切だと思った
	D-1	分からない言葉がでてくると意味を尋ねる子もいる
	D-6	先生からの質問や絵本の内容は全員で何かを答え楽しんでいた
	D-7	先生と会話を交える姿は本当に楽しそうだった
	D-13	参加型の絵本は皆で声を出して楽しんでいる様子だった
	D-18	子どもは先生の問いかけに近くの子どもと「○○だよね。」と楽しそうに会話していた
	D-21	じっと目で訴えてくる子、声に出す子とその子どもによって伝え方は違う
	D-23	読み聞かせをしている人との会話を楽しんでいた
	D-26	自分の好きなものを指さし言葉を発し見ていた
	D-27	静かに観ている子はすくなかった
	D-30	想像が豊で感想を言ってくれた
	D-31	子どもは先生の問いかけに近くの子どもと「○○だよね。」と楽しそうに会話をしていた
	D-35	絵本に泣いている子どもが出てくると「かわいそう、慰めよう」と友達に話していた

層別	NO	自由記載内容
⑪コミュニケーション	D-37	終わってから感想を言っている子が多い
	D-45	コミュニケーションをとりながら読めた
	D-46	パン泥棒を見つけると教えてくれた
	D-49	自分たちが飼っているカエルの本では会話を楽しんでいた
	D-52	参加型の絵本は楽しそうに参加していた
	D-55	読んでいると始めは小さな声が聞こえた
	D-63	会話を大切にしていた

５－１　学生が学んだこと

学生が自由記載したものをKJ法で抽出し層別したワードが11に分類された。その11のワードがどのように関わっているかまとめ、図５－１に示した。

実習後読み聞かせ調査結果の自由記載より、65％以上の学生が読み聞かせの場面において子どもの様子をとてもよく観察していたことがわかった。子どもが絵本にどのような反応をするのか、どんな場面でどんな動きをするのかなどをつぶさに観察し、子どもの行動や心境に対し理解を深めようとする積極的な姿勢がみられた。学生たちが実習現場において自ずと積極的な観察力を発揮していたことは非常に素晴らしく、絵本に特化した講義を事前受講していたことで読み聞かせの場面において観察という行為がより活性化した可能性を感じさせてくれるとともに、子どもへの理解を深め把握するために「絵本」がツールとして活用できる可能性を大いに感じることができた。

次に絵本の聞き手である子どもたちに意識を向けることの大切さ、子どもに呼応する動きの必要性に気づいた学生が18％、実習先での指導によりさまざまな内省や気づきを得、さらに自ら課題を発見している学生が17％前後示された。

このことは講義において「聞き手に常に意識を向けることの意味」「読み聞かせにおけるコミュニケーションの重要性」などの学びを得たことと関連があると思われ、講義を通して、絵本の読み聞かせは絵本を用いた「コミュニケーション」であること、絵本を読むことによる「心と心の通い合い」はコミュニケーションの基盤であるということ、絵本の共感から「愛着の絆、信頼関係」を築くことができると学んだためではないだろうかということが読み取れる。

５－２　絵本の内容をより効果的に伝える方法について～没入感、一体感、共有感の視点から考察した絵本世界へのいざない

絵本と読み聞かせに対しては、子どもたちが絵をよく見ていること、絵本の世界に没入していることなどに焦点をあわせ、より効果的な読み方を模索している様子をうかがうこ

とができた。学生が自由記載したものをKJ法で抽出し層別したものがどのようにかかわっているかまとめ、図５－１に示す。

絵本と出会い、子どもと出会い、子どもの見ている世界を観察し感じとる。対面で人と人が絵と言葉からコミュニケーションを通し学んだ証である。

子どもとの関わりを通した学びは授業科目で学ぶことのできない生きた学習である。絵本に対する学びが学生たちの成長の可能性をより拡大していってくれることを期待する。

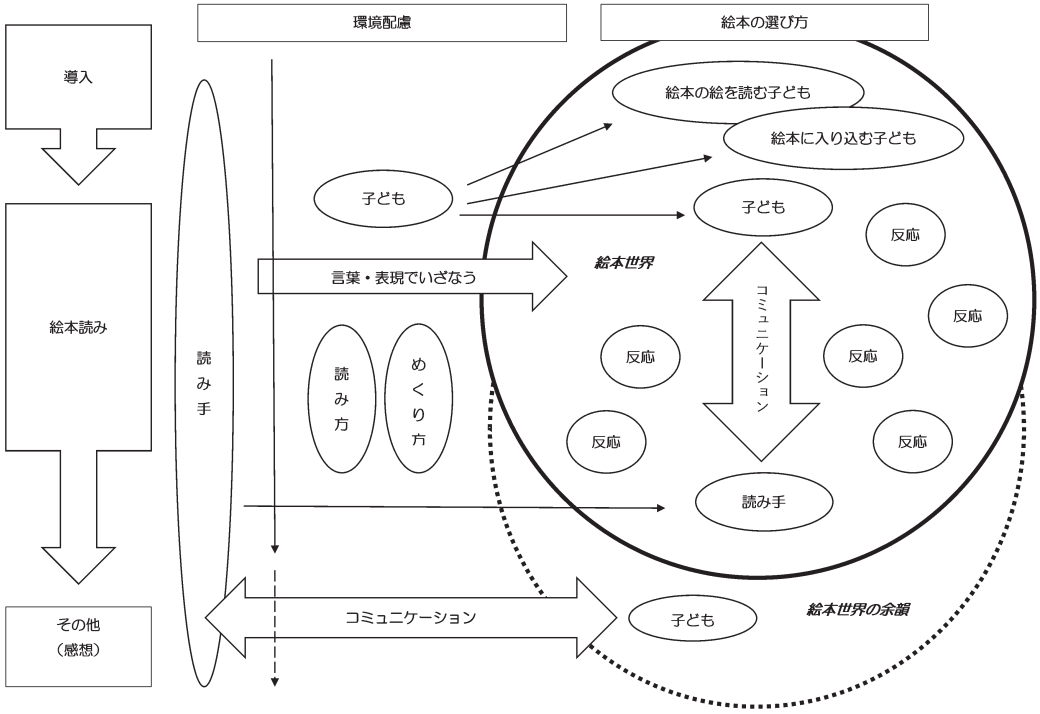

図 5-1　没入感、一体感、共有感の視点から考察した絵本世界へのいざない

６．総合考察

相互理解を深め多様性を知ることは保育現場のみならず私たちが社会で生きていくうえでとても重要なことである。今回の絵本講義では絵本を読む上での実践的方法について伝授したが、同時にさまざまな絵本に触れること、さまざまな考え方に触れることについても言及した。「絵本セラピー」によるグループワークもそのひとつだ。「絵本セラピー」グループワークで新しい発見や視野の広がり、気づきや刺激などを得た学生も多く、他者理解、自己認識に至る成長を促す効果も見られた。

実習前の学生たちは学ぶことややるべきことが重なり精神的に不安定であることも多い

とおもわれるが、ある特定の分野での学びを深めること、模擬的な予行を重ねることで不安軽減のきっかけになることも分かった。絵本の内容をより効果的に伝える方法について非常に関心が高く、現場で絵本読み実践者となることを深く意識している様子がうかがえた。

実習後、読み聞かせ調査結果では、子どもが絵本にどのような反応をするのか、どんな場面でどんな動きをするのかなどをつぶさに観察し、子どもの行動や心境に対し理解を深めようとする積極的な姿勢がみられた。学生たちが実習現場において自ずと積極的な観察力を発揮していたことは非常に素晴らしく、絵本に特化した講義を事前受講していたことで読み聞かせの場面において観察という行為がより活性化した可能性を感じさせてくれるとともに、子どもへの理解を深め把握するために「絵本」がツールとして活用できる可能性を大いに感じることができた。

マスク環境で育つ子どもたちと積極的にコミュニケーションをとることの重要性について気づきを深めた学生が多いことをうれしくおもう。安心安全な環境で読まれる絵本は共感をより深め子どもたちとの信頼関係を築くことをぜひ実践に生かしてほしい。

おわりに

今回、保育を学ぶ学生たちと時間を共にすることができ自分自身にとって非常に有意義な経験をさせていただいた。限られた時間ではあったが学生たちの学習の姿において感じたことをいくつか記してみたい。

「絵本セラピー」体験とその手法を用いたグループ活動においては学生同士の関わりが生まれ、結果として自然発生的な対話が各所で行われることとなった。さらに講義内容を反映した演習と実践でも互いの読みあいを通して緩やかなつながりが発生し、安心した空間のなかで能動的な学びが行われていた。これらは結果として学生たちの連帯感を促し、実習への意欲と関心をより高めることになっていたように感じた。また、読みあいの演習と実践では互いの示唆の中で問題を解決しようとする姿が見られ、ここへ講師が修正を加えるプロセスを重ねることで、学生が自らの問題に気付きさらなる修正を試みるという主体的な態度も育まれていたように感じる。本講義が学生たちの主体的な学びを後押しする一助となっていたら幸いである。主体的学びは社会へ出てからも続き我々がよりよく生きるためのベースとなっていく。これからを生きる学生たちの未来が主体的学びを得ることで大きく拡大していくことを心より願う。

結びに調査に快く調査に協力いただいたA校にて保育を学ぶ一学年の皆様、並びにご協力いただきました各位に心から感謝の意を表したい。

注釈

1　廣川　佳予子（ひろかわかよこ）絵本セラピスト協会認定絵本セラピスト
2　久保田真規子　新潟中央短期大学
3『言葉の力、生きる力』(2001）NHK 心の時代～宗教・人生～
4　秋田喜代美・無藤　隆　Japanese Journal of Educational Psychology（1996）44, p118
5　杉浦篤子・清水貴子『絵本読み聞かせの役割と可能性』藤女子大学（2014）
6　『コロナ禍が日本人のコミュニケーションに与える影響について』(株式会社ディーアンドエム）(2022)
7　佐野友恵「保育者志望学生の絵本体験に関する 研究」『教育学研究論集 13』(2013）pp17 ～ 24

引用文献

1）ＮＨＫ『言葉の力、生きる力』(2000)
2）秋田喜代美･無藤隆『幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境 に関する行動の検討』教育心理学研究 44-1p118（1996）
3）杉浦篤子・清水貴子『絵本読み聞かせの役割と可能性』藤女子大学（2014）
4）実施機関：株式会社ディーアンドエム
『コロナ禍が日本人のコミュニケーションに与える影響について』(2022 年 7 月）
5）佐野友恵『保育者死亡学生の絵本体験に関する 研究』『教育学研究論集 13』(2013）pp17 ～ 24

参考文献

・泰羅雅登『読み聞かせは心の脳に届く』(2009)（くもん出版）
・ダナ･サスキンド『3000 万語の格差･赤ちゃんの脳を作る親と保育者の話しかけ』(2018)（明石出版）
・ドン･ディンクメイヤー / ゲーリー･Dマッケイ『アドラー心理学･子どもを伸ばす勇気づけセミナー STEP ハンドブック』(1982)（発心社）
・村中李衣『読書療法から読みあいへ―「場」としての絵本』(1998)（教育出版）
・日本赤ちゃん学会事務局『ベビーサイエンス』(2015)（日本赤ちゃん学会）
・岡田達信『新・絵本は心の処方箋』(2021)（瑞雲舎）
・サラ・ローズベリー・ライトル、エイドリアン・ガーシアシエラ＆パトリシア・クール『一人より２人の方が良い・映像による乳児の言語学習力が仲間の存在で向上 』(2018)
・パトリシア・クール『早期の言語学習とリテラシー：教育への神経科学の影響』(2011)
・小西行郎『０～３歳心と脳をすくすく育てる本』(2009)（学研パブリッシング）
・玉川大学赤ちゃんラボ『なるほど！赤ちゃん学ここまでわかった赤ちゃんの不思議』(2014)新潮社
・『歌と絵本が育てる赤ちゃんの脳と心』(2012)（小学館）
・『AERA　With　baby　０歳からの子育てバイブル知育編』(2009)（朝日新聞出版）
・松井直『絵本とは何か』(1998）日本エディタースクール出版部